

## 2023 JUA/EAU Academic Exchange Programme 参加報告

内 木 拓 (名古屋市大)

名古屋市立大学の内木と申します。今回、2023年のJUA/EAU Academic Exchange Programmeにご選出頂き、ドイツとイタリアの2カ国に渡るプログラムを経験させて頂きました。私は、2020年のEAU congress開催に併せた本プログラムに選出いただいていたのですが、COVIDパンデミックによって、直前で渡航を断念いたしました。それ以後、EAU congressは、感染の状況に対応して時期を変えて開催されましたが、3年が経過し、今年になってやっと本来の形での現地開催が行われる運びとなり、私も念願のプログラム参加が可能となりました。今回の参加をお取り計らいいただいた国際委員の先生方に、心から感謝申し上げます。

本プログラムは、EAUとの共同事業の一環で実施されており、同時期に台湾泌尿器科学会(TUA)や韓国泌尿器科学会(KUA)からも、選出された方が派遣されるという特徴があります。今回日本からは、東京大学の田口慧先生と参加させていただきました。2020年の際には、KUAからも選ばれた方が紹介されていましたが、今回はTUAのメンバーのみ参加されていらっしゃいました。TUAから選ばれた3人の方に関しては、田口先生の手紙に子細が述べられていますので割愛させていただきますが、私より若く、大変優秀かつ個性的な方々で、寝る時以外はずっと同じ時間を共有しながら、多くの語り合いをすることができ、とても刺激的で楽しい毎日でした。

最初の訪問先は、ドイツで6番目の都市であるシュトゥットガルト(Stuttgart)市の30kmほど南にある、テュービンゲン(Tübingen)です。この街は、ドイツで最も古い大学の一つである、1477年設立のテュービンゲン大学が中心となっていて、住人の3分の1が本大学の関係者と、現地の方に紹介いただきました。大変古い街並みでいたるところに中世の面影が残るものの、装飾画の描かれた建築物が軒を連ねており、学園都市らしい穏やかで静謐な雰囲気が印象的でした。到着して早々にStenzl教授とディナーをご一緒させていただき、早朝のカンファレンスで2日間にわたって、各々の自己紹介をするようにご指示いただきました(写真1)。1日目を担当したTUAの3人のプレゼンテーション力のクオリティの高さに驚嘆し、その日の深夜から早朝にかけて、窓の外で小雪がちらつく中、スライドを作り練習して挑んだ事は、とても忘れがたい経験となりました。臨床に関しては、PETが日常の診療に組み込まれている事や、上部尿路癌に対してkidney sparing surgeryが積極的に行われているのが印象的でした。特に今回、U2の尿管癌に対して、術中の迅速病理診断を組み合わせた、開腹に

よる尿管摘除術とBoari flapによる再建術を見学できました。長期経過観察における癌制御に関しては、今後さらに様々な検証がされると思いますが、本邦でも腎温存を試みる機運は高まっており、大変参考になる内容でした。Fellowの助手1人との手術であったにもかかわらず、再建に1時間ぐらいしか必要としないスムーズな流れに、熟達した技術とスタッフワークを感じさせました。さらに、Stenzl教授が執刀されるRetzius-sparing RARPも実際に目の当たりにすることができ、次回執刀する際には試してみたい剥離方法など、とても勉強になりました。合間には、膀胱癌のオルガノイド樹立に関する基礎研究発表や講義、さらにラボ見学と、緻密なスケジュールで、息をつく暇もない毎日を過ごすことができました。また、休日にはテュービンゲンの街の観光、シュトゥットガルト市での博物館・美術館見学、さらには教室をあげてのディナーの機会も設けていただき、おいしいドイツ料理とワインに舌鼓をうちながら、熱のこもった活発な議論とともに、交流を深めることができました。個人的には、Stenzl教授からお勧めいただいた、テュービンゲンを含むシュバーベン地方の名物パスタ料理であるマウルタッシュェがとても気に入りました。このパスタ料理は、大変バリエーションに富んでいて、餃子風に挽肉を包んでもよし、細くしてスープにいれてもよし、というものです。JUAの先生方におかれましては、もし同地方を訪れた際には、本パスタを用いた料理の数々を、ぜひご賞味いただければと思います。

その後、航空機でイタリアに移動し、ミラノ市のEuro-



写真1 Stenzl教授とTUAのメンバーの先生方、そして田口先生と、現地のレストランでの集合写真



写真2 IEOにあるお洒落なBarと雰囲気のある店員さん



写真3 Musi教授がスタッフの方々と開いてくださったディナーにて

pean Institute of Oncology (IEO) での研修の機会をいただきました。ロボット支援下手術の high volume center であり、特に virtual reality (VR) の技術を応用したリアルタイムでのナビゲーション手術を見学することができました。中でも Musi 教授の執刀による無阻血での RAPN は、卓越した縫合止血技術によって、VR がなくても安全に行えているであろうことは、容易に想像できる内容でした。VR を用いた神経温存 RARP や、RARC および ICUD による代用膀胱造設術など、なにより、その場にいる fellow のほとんどが、手術操作の行程やその意図を説明できるレベルであることから、本施設での教育システムの素晴らしさを実感いたしました。

ミラノでは、コーヒーと言えばエスプレッソという文化であり、施設の中にとってもお洒落な Bar が併設されていて、多くの方が利用しているのが日本とは大きく異なり、興味深かったです (写真2)。そして夜には、Musi 教授とスタッフの方々によるディナーの機会を設けていただき、ドイツ滞在の折と同様に、手術や研究に関する熱量のある議論とともに、ミラノ料理とワインをおいしくいただきました。Musi 教授は大変気さくな方で、日本からのお土産として私が持参した日本手ぬぐいと共に、記念写真を撮影いただくことができました (写真3)。これは手術室でバンダナとして使うからねとのお言葉もいただき、お土産の選択に悩んだ甲斐があったと感じました。

(実際に、本施設で勤務されていた外回りの看護師さんの中には、日本の漢字でデザインされたバンダナを使用されている方が数人いらっしゃいました。)

研修終了後は、そのまま EAU congress に参加しました。ここ数年、海外学会は全てウェブ参加での発表であったため、久しぶりの現地での発表で、大変緊張いたしました。大過なく終えることができました。今回、ESU コースや Hands on training のコースが無料で全て受講できるという大変ありがたいプログラムでしたので、多くの時間をそれらのコースに費やすことができました。中でも、2018年に本プログラムの一環で私たちの教室に来ていただいた R.C. van den Bergh 教授による active surveillance の講義は、大変勉強になる内容で、多様化する前立腺癌治療の最先端を学ぶことができました。そして大ホールでのライブ手術は、3分割された画面それぞれで別の手術が行われ、壇上で質問を受け付けて現地の執刀医に伝えて議論する形式でした。ここでも無阻血による、腹腔鏡下の腎部分切除を見学することができ、卓越した技術と共に、腎機能温存のための泌尿器科医としての姿勢や矜持も、学ぶことができましたように感じました。

3/12日の日曜日には、EAU congress 恒例の International Friendship Dinner に招待いただき、参加いたしました。日本出国の2カ月前に、ドレスコードは Black tie と記載があることに気づき、ウェブで検索してみると、その内容に驚愕したもの、今となってはいい思い出です。とても広いパーティ会場に設置された壇上で、学会の様々な賞の授与式が行われ、TUA のメンバーの先生方と田口先生と共に、重厚な盾を、Stenzl 教授より頂くことができました。また、大変混雑した会場でしたが、私たちの一行を見て気さくに流暢な日本語で話しかけてくださった方が、EAU のアンドロロジー部門会長の Sofikitis 教授でいらっしゃいました。鳥取大学に留学なさって



写真4 野々村教授と Sofikitis 教授と田口先生と共に

いた際の体験を、大変懐かしそうに語られるお姿が印象的でした(写真4)。

訪問する先々で常に感じられたのは、教授の先生とスタッフの方々の、医学に対する熱意と深い知識、そして人間や文化に対するリスペクトに基づいたホスピタリティです。大変忙しい中であるにも関わらず、私たちの事を最優先に考えてご配慮をいただきました。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。このプログラムを通して得られた経験や交流を糧として、今後の臨床・研究・教育に邁進し、COVID pandemic 後の新たな国際交流・協力の推進に携わっていかれたらと思います。最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて下さった EAU, JUA, そして TUA の先生方、関係者の皆様、ご推薦頂いた安井孝周教授、そして私を送り出してくれた名古屋市立大学の教室の皆様に、心からお礼を申し上げます。